

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(小学校用)

都道府県名	鹿児島県
-------	------

学校の概要

学校名	鹿児島市 大明丘小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	2	3	3	2	2	0	15	28
児童数	76	75	82	83	67	80	0	463	

研究の概要

1. 研究主題

学ぶ楽しさの中で、確かな力が付く指導

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

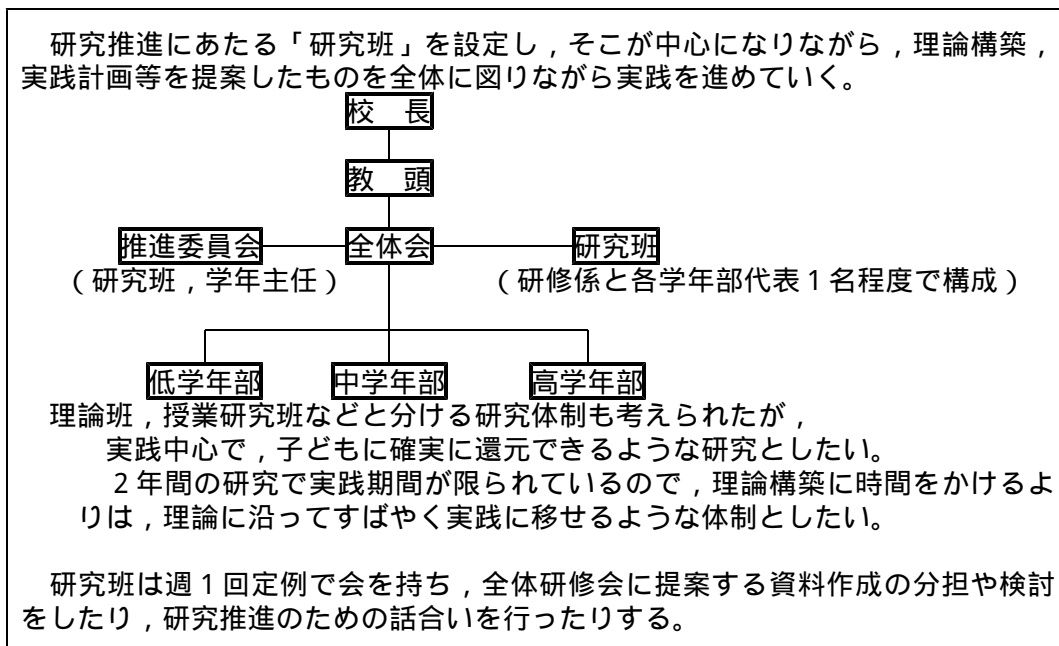
・全学年・算数
職員の意識として、学力の基礎としての教科であり、全学年で全校体制の研究として取り組みたいということがあったため。
実態を把握した際、児童の苦手意識が高く、全国成績と比較しても学力に劣るところがあったため。

(2) 年次ごとの計画

平成 15 年度	<p>テーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究理論の確立と授業をとおした仮説の検証 研究の見通し(仮説) 〔仮説1〕一単位時間の授業において、評価規準を意識した授業設計を行い、評価に応じた指導を的確に行っていくならば、子どもが目標に向かって学習に主体的に取り組むようになり、子ども一人一人が確かな力を身に付けていくことができるのではないか。 〔仮説2〕題材をとおして、指導の結果を継続して累積したり、子どもが意欲をもって取り組むような学習課題を設定したりするならば、子どもが自分の学習状況に応じた学習に主体的に取り組むようになり、子ども一人一人が確かな力を身に付けていくことができるのではないか。 〔仮説3〕授業外においても、子どもが主体的に学習に取り組む様々な手だてを、意図的計画的に設定し、指導を的確に行っていくならば、子ども一人一人が確かな力を身に付けていくことができるのではないか。 <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各研究校の実践の様子、課題の洗い出し ・本校児童、保護者の意識、実態等の集約、課題の把握 ・研究テーマ、年度計画、研究組織の検討 ・授業における基礎学力定着の手だて検討(各学年研究授業をとおして) ・授業外における基礎学力定着の手だて検討 ・児童の実態を把握するとともに、実態に沿った指導に生かせるプリントの作成 ・基礎学力定着のために、教師が共同で行う指導体制の検討 ・成果と課題の整理(研究のまとめ作成)
----------------	--

平成 16 年 度	<p>テーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究理論を裏付ける授業，授業外における実践と反省，改善研究の見直し（仮説） ・平成15年度と同じ研究の内容・方法 ・研究内容の共通理解と実践の継続 ・授業における基礎学力定着の手だて検討（各学年研究授業をとおして） ・授業外における基礎学力定着の手だて検討 ・研究内容を具現化する評価規準表の作成（全学年，全単元分） ・基礎学力定着のために，教師が共同で行う指導体制による指導の実践
--------------------	---

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

授業における実践の例

〔手だて1〕 子ども一人一人が本時の学習内容をしっかりと身に付けることができるように，今までの固定化された学習過程を見直し，題材の位置や評価規準の重点観点を基に柔軟に指導する。

単元における重点観点（関心・意欲，考え方，表現・処理，知識・理解）を基に，それに応じた授業設計を行うこととした。

例えば，「数学的な考え方」が重点の場合には，「自力解決」の時間により多く時間をとり，「表現・処理」が重点の場合には，「適用問題」の時間により多く時間をとるといったことである。これにより，1時間1時間の基礎・基本であるその時間の目標をしっかりと身に付けることができた。

〔手だて2〕 評価がその後の指導により生かせるように，今までの評価規準を見直し，見取りやすいように，量的な要素を取り入れた評価規準を設定する。

評価規準が，「より指導に生かせるようにする」ために，量的な要素を取り入れた評価規準を設定し，授業を行うこととした。

例えば，「8割程度できる」とか「3種類の図形を使ってできる」といったようにより具体的な子どもの姿が見取れるような評価規準にした。これにより，その時間で求める子どもの姿がより明確になるとともに，これに沿った具体的な指導が行えるようになった。

〔手だて3〕 子どもが意欲をもって学習に取り組むとともに、子ども自身も自分の学習状況を把握しやすいように、評価のあとの指導に、すべての子どものノートへの赤ペンチェック（付け）を取り入れる。

子ども一人一人に、確かな指導を行うことができるようにするとともに、子どもが意欲をもって学習に取り組めるようにするために、1時間の授業の中で、必ず1回は赤ペンチェック（付け）を行うこととした。

付けの活動は、本時の重点観点を意識して活動を絞り、付け指導が教師の負担にならないようにした。

この手だてにより、次のような成果が教師からあげられた。

- ・どの子どもへもしっかりと指導が行き届くようになった。
- ・本時の重点観点を今まで以上に意識し、指導を進められるようになった。
- ・子どもたちも教師からの 付けに、意欲をもって学習に取り組む姿が多く見られるようになった。
- ・ノートに累積された教師の 付けの結果が、単元の評価にも活用できることが明らかになってきた。

〔手だて4〕 子どもが学ぶ喜びを味わいながら、確実に学力を定着することができるように、TTや少人数指導のよさを生かした指導を行う。

TT、習熟度別指導、少人数での指導などそれぞれの指導形態のよさを整理し、学習内容に照らして適切な指導を行えるようにした。また、子ども一人一人に確かな力を付けるために、単元における学習過程によって、より効果的な指導形態を用いて指導を進めることとした。

例えば、単元の学習過程の位置によって、下の基本的な指導形態とした。

第1時 一斉 (TT)	第2時 一斉 (TT)	第3時 一斉 (TT)	第7時 習熟度別 (課題別)	第8時 習熟度別 (課題別)	第9時 一斉 (TT)
-------------------	-------------------	-------------------	----------------------	----------------------	-------------------

単元前半から中盤にかけては、数学的な考え方を高める学習などに適したTTや一斉指導に重きをおく。

単元後半に特に「表現・処理」「知識理解」の習熟を図る少人数指導とする。

終末は学級集団で学習の交流を図る

また、1年生には特に学習のしつけや学び方の基礎を身に付けることができるようにするために、5、6年の担任が専科等の空き時間を使って、1年生の授業補助に入るような指導形態でも学習を進めた。

これらの手だてにより、次のような成果が教師からあげられた。

- ・指導形態をうまく活用しながら、学習内容にあった指導を進めることができるようになった。
- ・習熟度別指導などは固定せずに、単元後半で表現・処理などの観点到絞って実施するようにしたため、子どもも意欲をもって学習に取り組む姿が見られるようになった。
- ・1年生により手厚い指導が可能になり、確かな力が身に付く子どもが増えるとともに、学校の全員の教師ですべての子どもを指導するという教師の意識が高まってきた。

授業における実践の例

〔手だて1〕 子ども一人一人が学習したことをしっかりと定着することができるように、計画的、意図的に放課後指導や家庭学習の指導を充実させる。

授業で学習したことを、確かな力として一人一人の子どもがしっかりと身に付けることができるように、放課後指導や家庭学習を今まで以上に充実させることにした。

【放課後指導の充実】

週一回、「学力向上の日」を設定し、特に補充的な学習に重点をおいて指導を進めることにした。今までは担任1名で指導をしていたが、学力に個人差が大きい5、6年の指導には1年担任や指導法改善の教師が入り、担任とともに複数で指導することとした。

【家庭学習の充実】

年度や学期初めの学級PTAでは、どの家庭でもどの子どもたちも同じように取り組めるように、その学年における基本的な家庭学習の方法や内容について説明をした。また、学級間や担任間で指導差がでないように、学年会等を利用し、どの学級でも同じように取り組むようにした。

時間の目安としては、「学年×10+10分」を全校で統一して家庭に呼びかけた。

これらの手だてにより、授業での補充的な指導が放課後の時間や家庭での学習で計画的に行えるようになったり、家庭での生活習慣が身に付き、学校での授業にも意欲的に取り組める子どもが増えてきたりした。

2. 今後の課題

本年度は取組の1年目であったので、実践の効果がまだ十分に子どもの姿として現れていないものもある。また、実践を始めて日が浅いこともあり、これらの取組が、子ども、保護者、教師に定着していない面も見られる。

これからの課題としては、実践を継続していきながら、研究が子どもたちに還元されるよう努めるとともに、常に反省 改善の視点を持ちながら取り組んでいくことが必要である。

学力等把握のための学校としての取組

算数科の基礎である「数と計算」領域に絞っての計算力テスト作成とそれを活用しての一人一人の計算力等の実態把握

- ・学年内や学年間の系統を考慮し、段階的に順を追って取り組めるように作成した。
- ・子どもたちが主体的にいつでも取り組むことができるように、算数コーナーに全学年分を設置した。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

平成17年2月4日(金) 研究公開予定
平成16年3月 研究の中間まとめ編集
平成15年度フロンティアティーチャー、3校で研究授業の指導や活動紹介
平成16年3月 研究成果普及のHP作成

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- | | | | | |
|----------------------|--|--|--|----|
| 【新規校・継続校】 | <input checked="" type="checkbox"/> 15年度からの新規校 | 14年度からの継続校 | | |
| 【学校規模】 | 6学級以下 | 7~12学級 | | |
| | <input checked="" type="checkbox"/> 13~18学級 | 19~24学級 | | |
| | 25学級以上 | | | |
| 【指導体制】 | <input checked="" type="checkbox"/> 少人数指導 | <input checked="" type="checkbox"/> T・Tによる指導 | | |
| | <input checked="" type="checkbox"/> 一部教科担任制 | <input checked="" type="checkbox"/> その他 | | |
| 【研究教科】 | 国語 | 社会 | <input checked="" type="checkbox"/> 算数 | 理科 |
| | 生活 | 音楽 | 図画工作 | 家庭 |
| | 体育 | その他 | | |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | <input checked="" type="checkbox"/> 有 | 無 | | |